
Rの称号

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rの称号

【NNコード】

N6496U

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

主人公・藤堂俊也の通う超凜学園は、超上の力を持つ者だけが入れる学園。クラス分けの試験をさぼった俊也は当然最下位クラス。そんな彼の下に降ってきた少女は何か秘密があつて？
王道っぽい感じの自称ファンタジー。そのうち人によつては残酷と感じる描写も出てきます。主人公最強ものです（ヒロインも最強？）
。苦手な方は注意してください。

プロローグ

「俊也さん、起きて。起きて下さ~い！」

寝た状態の俊也と呼ばれた男をゆする彼女は白石悠里^{しらいし ゆり}。桃色のやわらかそうな長い髪を一つに縛つて、スタイルの良い女性。彼女は何度声をかけても起きてくれない俊也に困ったように頬を膨らませ、齶を吊り上げる。それでも可愛いと思える彼女の顔は、男にとつては凶器だろう、なんて俊也は薄田を開けながら考えていた。

悠里は淡い緑色をしたシャツに、緑と茶色のチェックの入ったスカート……まあいわゆる制服なのだが。その制服を完璧に着こなし、今だ起きない俊也にため息をつく。そして左手を垂直にまげ、

「早く起きないと丸焦げにしちゃいますよ？」

なんていいながら手に小さい炎のかたまりを出し始めた。

「うわああああー！ちょっと待つたー！おきてる、おきてるぞー！？だから人に家で殺人未遂をするのはやめようかー！いつも言つてるけどー！」

冷汗ダラダラで飛び起きる俊也に、悠里はにっこりとしながら言った。

「おはようございます。新学期だとこうの、遅刻しますよ？」

「…………はい」

それに俊也は小さな声で呟き返した。

俊也は淡い緑色をした制服をだらしなく着て、寝癖のついた黒髪をワシャワシャとかく。まだ眠いのかその黒い瞳は軽く閉じられていて、とりわけ整った顔立ちが寝癖と薄田のせいでお無しになっている。

そんな俊也と笑顔が耐えない悠里は、仲良く並んで登校中。

「クラス替え、一緒だといいですね」

「んなわけねえだろ。俺は試験さぼったんだ。最下位のDクラスに決まってるだろ」

彼らの通う学園は、ただの学校ではない。
超凜学園。

その学校の名前は、当時学校を立ちあげた人が、『超上の力を持つ若き男女達が何事に屈することの無く、凜とした立ち振る舞いで良き方向へと誘う』ことを願つて『こういった長つたらしい』と書つたのが由来らしい。

まあ、そんな余談はいいのだが。

彼らの通う学園は、超能力を持つ人が入る、特別な学校なのだ。超能力の種類は多種多様。悠里みたいに炎を作り出すものもいれば、雷などを操つたり、影を操つたり。

そして彼らの学園は一学期製で、毎学期ごとに試験を行い、成績順にクラスが振り分けられていく。

時折発見される、天才。

学園に認められた天才、つまりは危険な能力を持ち合わせているか、自分の能力を使いこなしているか。大抵はその二つに分けられる。選ばれた天才のクラスはS。一般の能力者たちはA～Dに振り分けられる。

超凜学園。

そこは、とてもなく広い敷地の上に成り立つ学園。その正門に立ち、超凜学園を見つめる。

「うわ、いつ見ても嫌味つたらしいでかさだな」

その広さ、東京の四分の一をしめるほど。

「おい、とうとう藤堂！」

「げ、鬼塚おきづか……じゃなくて沖塚先生。なんすかー」

「なんすかー、じゃない！今鬼塚つつたろー？…ってかさつと教室に入れ！授業が始まるぞ」

「ういーっす」

開口一番やかましい声を張り上げるこの男。

黒髪をスポーツ刈りにした、ジャージ姿の体育教師。沖塚恭一、25歳。独身。

彼の罵声は鬼のごとく恐ろしい形相と一緒に飛んでくるため、ほと

「何だ、そのだらしない格好は！第一ボタンまできちんとしめろ！ついでに毎度毎度遅刻するんじゃない！下るのは白石の評価なんだぞ」

「え、俺の評価は！？」

「己はもう下りきつてゐるだらうが！」

なんて、口うるさく突っ込んでくる今どき珍しい教師。やつとのことで通過した鬼塚…もとい沖塚の門。その後校庭に張り出されているクラスわけを見て

「あー、やつぱりな

「離れちゃいましたね

「ま、当然だな

悠里はBクラス。彼女は容姿もよければ成績も良い。そして俊也のクラスは想像通りD。試験を受けなかつた彼が入るべくして入るクラス。

悠里はかなり残念そうに、ではまた明日、と言つて廊下を歩き去つた。

その去つた背中を見つめて、やつと開放された俺フィーバー、とか変なことを考えながら開放感に身をしみさせていた。

俊也のクラスはD。

簡単に言えば落ちこぼれクラスだが、もつ一つ言つと能力の強さを鼻にかけないクラスである。

ガラガラっとドビラを明けて入ると、なんかめっちゃ知つている奴らがいた。

「よう！お前も試験さぼったんだってな！」

「本當かい？君も試験出られなかつたのか」

「……」

先に声をかけてきたのは坂上隆さかがむちゅう。

少し赤のかかつた茶髪に、茶色い瞳。斬新な性格で、女好き。能力は生命の早送り。つまりは生命の時間を少しだけ早く進ませることなのだが、本人はこの能力をあまり好いていない。なんでも「早送りなんてしちまつたら女の子が若々しくなくなるだろ？」だそうだ。

次に声をかけてきたのは信条翼しんじょうよく。

癖の無い真直ぐな茶髪の、爽やかスマイルを顔に定着させたような男。その爽やかな笑みからこぼれる真っ白な歯は嫌味なほどだ。能力は風を操ること。能力までもが爽やかなスマイル野郎。人付き合いが得意で、たぶん嫌われているとしたら信条のモテ度をねたむ可愛そうな男達からだけ。

そんな彼等を俊也は見て、

「で、お前らは何で試験でなかつたわけ？」

「いやー、道端で今にも生まれそうな赤ん坊をお腹にかかえたご婦人がいてなー」

「それでその女性を病院まで連れて行つたら時間切れつて言つわけ

なんだ」

「……」

なんてベタな奴らだ、と内心思つても口には出さない俊也だった。

そして新学期のため早くも学校が終わった彼らは、すぐに帰宅し始める。

そこで俊也が、爆弾とも呼べるような人間を拾うことになるとは思つてみなかつた。

プロローグ（後書き）

この作品を丁寧に読みていただきありがとうございます。
もしよろしければ感想、評価などよろしくお願いします！

「はあーだりいー」

そんなことを口ずさみながら徒歩で帰宅する俊也。学園には寮もあるのだが、俊也は寮に泊まるのがイヤで少し離れたアパートを借りている。

徒歩15分、遠くもなければ近くもない微妙な場所にある。そこの大先輩さんが俊也の親戚で、快く俊也を受け入れてくれた。問題を起こさないという条件付で。

俊也は近道をするために商店街の路地裏に入る。

長い商店街を突っ切るなんてダルイことしたくなー、なんて彼は思いながらゴミ置き場の脇をすり抜け、塀を越えようとした時：

ガラガラガラッ！

何かが転がつてくるような音がした。後ろを見ても、横を見ても、前を見ても誰もいない。なら、上か？なんて冗談めかしてみてみると

「うそだろっ！？」

屋根から、女の子が落ちてきた。地面と平行になるような体制で落下してきた。

気を失っているらしく、体が動いていない。

そんな彼女を俊也はお姉さま抱っここの状態で受け止めると、ジーン

と、彼女を受け止めた衝撃が足に痛みとなつてはしる。

おいおい嘘だろ？そんな展開あつてたまるかよ、なんて彼は思つ。

「空から女の子降つてくれるとか……」

そんなことを呟きながら彼女を見てみると……。

美少女だった。

悠里にも劣らないくらいの、美少女。むしろ悠里以上の容姿を持った女の子かもしない。

ちょっとふわっとした可愛い感じの水色の髪を長く伸ばしていく、切れ長の瞳。可愛いとも、美しいともいえるような、むしろ言えないうな微妙な一線にいる少女。その華奢な体躯に透き通るような白い肌。

そして、ズタボロになつた彼女の服装。

よくよく見ると服は途切れ途切れにつながつていて、スカートから血のついた太ももが乱れ出ている。
かなり衰弱しきつている状態だった。

「 やばい、かな」

そんなことをいいながら、彼は振り返る。
するとそこには

「 よく私の気配に気づけたわね」

なんていう、女が立っていた。

赤い短髪の、前髪を上げた二十歳前後の女。

その手には血塗られたナイフが一本握られていて。ああ、ちょっと死亡フラグが成り立つてきたかも、なんて彼は思いながら、ちょっと強気の口調で女に問う。

「大人がなに、いたいけな美少女を傷つけてるわけ？」

「とりあえず、この娘に傷を負わせた理由、追いかけている理由を聞いて出して逃走、それが一番だな、なんて彼は思う。しかし、その女から返事は返つてこない。それどころか

「その女をこちらにわたしなさい。関係のない人間を殺したくはないわ」

なんて脅迫しだした。

一見取引に見えても、これは立派な脅迫だ。殺されたくなければ彼女をわたせ、この女はそういうているのだ。そのことによつて俊也に冷汗がにじみ出る。

話しの通じるうちに解決策を見つけなければいけない。

この娘を引き渡せば簡単だろうが、あいにくこんな美少女をたてに自分の身を守ろうだなんて気にはなれない。これが野郎だつたら即座に引き渡してくるかもしれないが。

「じゃあ、この娘をわたしたらあんた達はこの娘をどうするわけ？」
「……」

女は、口をつぐんだ。

良い扱いはされない。それはその沈黙でわかりきつた。そして仲間がいることも。

なら、この娘を赤髪の女にわたすわけにはいかない。わたしたら色々と俺の男としてのプライドみたいなものがボッキボキに折れる、と彼は確信する。そして女にかなり強気に出ると

「あいにくだけど、保護者でもない奴に美少女わたすぐらいだった

「うわあ、死になさいー！」

「…………そりゃ、じゃあ、死になさいー！」

ほりあたよ。

やつぱり俺殺されるんじやん、と、予測できたことに対する自分の命が危ないかもしれないなあ、なんて能天気に考える。女はものすごい速さでこちらにかけてきた。

でも、どうせ死んだつたら第一コミッター解除してもいいかな。

なんて考えながら、この美少女を壁に寄りかからせるより座りせらる。

所々に流血しているのが痛々しい。

しかし、今はこの美少女を守ることが先決だ。彼は自分の頬をパンパン、と二回ほどはたき、覚悟を決める。

「うめん、手加減はできないと思つ」

「はあ？ なに言つてゐるのよ？ 死ぬのはあんたよー！」

威勢よく駆けて来る女に、俊也は小さくため息をついた。

『vvv第一リミッター・解除vvv』

俊也は誰にも聞こえないような小声で呟く。

途端に、彼の動きが目に見えないほどに速くなつた。

彼は速いスピードで走る女よりも高速で動き、女の腹部に一発拳を入れる。

「があ…………な、こ…………？」

女は何がなんだかわからない、とまづまづな顔をしながらその場に倒れた。

そのときの俊也の、彼の瞳には赤い鮮血の色と、黒く濁んだ悲しい光が蠢いていて。

そして彼は、ゆっくりと氣絶している美少女の方を見て、そろそろくるかな、なんて彼は考える。

「ぐ…ほりきたよ…がああ！…げほつ…げほつ…」

体がきしむのを感じながら吐血した。

朝日がまぶしくて、目が覚める。

「ん……」

「お。起きたか美少女」

「！？」

はっと、目が覚めた。

少し狭い一室。彼女はベッドに寝かされていて、彼女の顔を覗き込む男の姿があった。

バツと飛び起きて、体勢をかまえる。

すると男は

「いやいや、俺君の事狙つてる奴じゃないから。むしろ救世主様だから」

「…………」

「あ、信じてないって顔してるな。あの赤髪の女追い払ったの俺なんだぞ？」

彼はそんなことをいいながら屈託なく笑う。

時刻は、10時。

ずっと起きていたであらう彼はいまだ寝癖のついたままの髪をくしゃつとかいた。

追い払った？

こんな馬鹿そうな男が？

そんなことを思つてはいるが、彼の服装に目がいいくだらしなく着られている淡い緑色の制服……。

「あんた、超凜の生徒？」

「ああ。ついつてもロクラスだけどな」

「……」

ロクラス。それは超凜学園の最下位のクラス。

そんな彼があの女を追い払つたつて言つの？

疑り深い目で見据えているが、今度は彼が自己紹介を始めた。別に聞いていないのに。

「俺は藤堂俊也。お前は？」

「…………デイーモン・R・美鈴^{ミレイ}」

「長い名前だな」

「私は日本人と外国人のハーフなの」

「納得」

すぐに納得した彼、俊也は、美鈴に

「さて、と。とりあえずなんど迫られてたか。できる範囲内で教えてくれる？」

できる範囲内といつ言葉を強調して、問う。

しかしそれを答えることはできない。

答えてしまつたら彼は組織に追われるか、自分を狙つてくるかだな、と彼女は確信した。

「…………『めんなさい』。答えられないわ」

「じゃあこっちから質問する。答えられるものだけ教えてくれれば

良い

「わかつたわ」

彼は了承した美鈴を見て、少し笑んでから質問を始めた。

「能力は？」

「もつてる。でも、言えない」

「あの追つてきていた女の組織名は？」

「言えない」

「なぜ追われていた？」

「言えない」

「家族は？」

「皆散り散りで暮らしているわ」

「最後。スリーサイズは？」

「上から　って、なに言わせんのよー？」

美鈴は腰にはめていた拳銃をものすこに速さで取り出し、俊也の頭に近づける。

この男、ただの変態か！？と、内心イライラしながら引き金を若干引く。

すると彼は若干あせったような声色で、

「うおっ。引き金を引くのはマジ勘弁」

「不可能」

「ちょ！マジで、俺救世主だぞ！？命の恩人を殺すのかお前は！」

「そもそもそこが怪しいのよ！なんで私の拳銃一つかわせないあんたがあの女を追い扱えるわけ！？それにあんたに外傷が一つも見当たらないわっ」

すると彼は一瞬押し黙り、視線を逸らした。

なにか、やましいことを奥さんに見つかった夫みたいな表情をしている。いや、たとえが悪いか。

瞳に黒い濁め氣がはしり、彼は苦笑しながら答えた。

「それはあれだ。俺の能力だ」

「どんな？」

「言えない」

「……」

今度は、美鈴が質問をする側に回った。
しかし彼は答えない。

美鈴に秘密があるように、彼にも言えない事情があるのであるのだろう。
美鈴ははあ、とため息をつくと、

「とりあえず、助けてくれたのは感謝するわ、ありがと」
「どういたしまして」

「じゃあ、迷惑もかかるから、私は出ていくわね」

「行き先は？」

「伯父のところ」

そういうて、ベッドから立ち上がる。

瞬間、ズギッと足に痛みがはしつた。一瞬顔をゆがめたが、すぐに無理やり戻して、このアパートを出た。早く、伯父の下へ……。

俊也は彼女の後姿を眺めて、携帯が光っているのが目にに入る。

「なんだ？」

履歴 23件

氏名 悠里

・ 悠里 悠里 悠里 悠里 悠里 悠里 悠里 悠里

・

悠里

内容

『「めんなさい。今日は朝、お出しだけで行けないができません。あわんと学校に来てくださいね!』

『俊也さん? 学校に来てなかつたみたいですねけど大丈夫ですか?』

『俊也さん? もしかして具合悪いんですか?』

『俊也さん! ? 今から行きます!』

「…………」

ピンポーン。

たぶん悠里だわ。相変わらずの心配性だ。ちょっといき過ぎな気もするが…。そんなことを考えながらガチャ、と扉を開けると、今にも泣き出しそうな顔で悠里が立っていた。

「俊也さんー何で答えてくれないんですか! 本気で…心配した…ヒック、のに…」

訂正。

すでに泣いていた。

「悪い。たまたま携帯見れなくつてせ」
「うわーっ!」

そのまま抱きついてくる悠里。

本気で心配させたようだ。

もう一度、ゴメンと謝る。すると突然悠里は手から炎塊を出し始めた。

「それはよじとじで後せでんへ。いつも出て行った水色の髪の女の子
は誰ですか?」

あれ、悠里さん。笑顔が怖いですよ？

つてか、さっきまで泣いてませんでしたか、あなたは！
俊也は本気で冷汗をかき始めた。しかも猛烈にダラダラと。

「えっと あれは

どんどん悠里の炎が巨大化していく。

浮氣とは好きあつていてなんらかの結婚や恋人という接点がある人がいうものですよ！？なんて彼は内心考えながらも、向かつてくる炎に恐れをなした。

アパートに俊也の絶叫がこだました……。

「 プスプス…。」

俊也は悠里のせいでのけた体をふらふらと動かしながら教室に向かつっていた。

ガラガラッ。

扉を開き、Dクラスの教室へと入る。

「 おい、藤堂…。」

開口一番、坂上の声が響いた。

坂上方をかるうじて見ながらなんだ、と問いかけると坂上は声を荒げながら顔を近づけてきた。

「 転入生だ！ それもすんごい美少女…。」

「 近えよ……。美少女？」

坂上が指をさす。その方向を見ると……

「 「 あああー！！！」

美鈴がいた。

二人とも相手を指差し叫んでいる。

ま、まさか…… 今日から同じクラスで生活するのかー？』の爆弾女とー。

増えたクラスメイト

「 「あああ——つ……」

一人はお互に指をさしながら叫んだ。

彼女は淡い緑色の制服、超凛学園の制服を着て、腰に一丁の拳銃を携えている。ふわふわとした水色の髪は一つに頭の上で団子状にまとめていた。

「なになに？お前ら知り合い？」

「そうなのかい？それは是非とも聞かせてほしいね」

叫ぶ俊也たちを見て、坂上^{さかがみ}と信条が問いつてくる。それもかなり興味深そう。

しかしその言葉は彼らの耳に入る」とはなく。

「なんでお前がこんな所にいるんだよ！」

「仕方がないでしょ！伯父さん、この学園の学園長なんだからっ！伯父さんに『テスト終わっちゃったから一学期間だけ、Dクラスで我慢してね。これあげるから』なんていわれたら断れないでしきうが！」

「うおい！最後おかしくなかつたか！？『これ』ってなんだよ！？お前は何に釣られたんだあ！？」

「それは……そんなことはどうでもいいのよーとにかく、今日からクラスメイトよ。仲良くなれ！」

美鈴は顔を若干赤らめながら手を差し伸べてきた。しかし俊也は

「断る。お前といふと俺が死ぬ。色々と」

今朝もお前のせいで悠里に そう続けようとすると、カチヤ、
と最速で抜かれた拳銃の銃口を後頭部に押し付けられる。それを見
ていたクラスの奴らがどよめいた。まあ、無理もない。これだけの
速さで拳銃を構えられ、その上能力者の女なんて早々いるものでは
ない。

彼女は俊也の頭を前に、引き金に指をかけ、少し引く。

「それは私に対する宣戦布告とどうてもいいのかしら？」

いいやいいや！ 引き金後数三！ 引いたる確実は天に召される
からな！ ? 謝るか？ 殺せなーでくー！ ほら、 痞命の恩

「ぐどい！いつまで命の恩人だとか救世主だとか言うつもり！？」い

ヘル死ね!

引き金は引かれなかつたが、代わりに拳銃の腹で殴られた。
しかも…

「おい、その拳銃なんか特別な素材で作ってあるだろ！ガチで痛えぞ！」

「そうよ？この拳銃はオリハルコンで作られているの」

特性素材だつたらしい。どうりで痛いわけだ。

すると今度は坂上が拳銃に興味を持った。

荒事は拳銃で対処している。

そんな彼は美鈴に近寄り、

「美鈴ちゃんの拳銃つてオリハルコンなんだ…？ちょっと見せてくれないか？」

「え？ いいけど……」

突然のことの一瞬驚いた美鈴は、坂上の拳銃を見る目（キラキラしている瞳）を見て、渋々承諾した。

すると

ガラガラッ

不意に教室の扉が開いて、担任と思わしき人物が入ってくる。

「ホームルームを始めます」

低く響く声だった。
見ると黒いステッスに身を包んだ、癖のない黒い長髪の、スマイルを信条同様に顔に定着させたような若い男が教卓の前に立っている。

「えー、昨日は出張で挨拶ができませんでしたが、くわかわ黒川と言います。
このクラスの担任です。皆さん、質問はありませんか？」

につっこりと黒川は言った。途端に、女子達がキヤアーーーーと叫びだす。次々に、生徒が といつても女子だけだが 手を挙げ、質問する。

「先生の能力は…？」

「秘密事項です」

「先生は何歳ですかあ？」

「25です」

「奥さんは…？」

「募集中ですよ」

「気になる女性のタイプは！？」

「気のきく優しい女性でしょうか？」

「さやああああ——！」

……などなど。

全ての質問に満身の笑みをもつてして答えた黒川。男子から軽い殺意が感じられるが、まあ黙つておこう。

不意に気になり、美鈴のほうを見てみると彼女はむつすうとした顔つきで頬杖をつき、机の斜め下……足元の辺りを見下ろしていた。どうやら彼女は胡散臭いスマイル男は嫌いなようだ。

そんなこんなで朝の朝会は女子の叫び声で幕を閉じた。

黒川が退場していくとき、一瞬こちらを冷たい表情で見た気がするが、気のせいだろうか。

一日の授業も平凡に終わり、俊也はそれと教室を出た。

あまりにも長く教室に長居していると悠里が迎えに来て、もてない男子共の餌食になるからだ。俺が。

徒歩十五分。

それがアパートへの帰りに使う時間。路地裏の近道を使えばもっと

速いのだが、あいにくまた巻き込まれるのも『メン』なので今日は近道をせずに商店街をそのまま突っ切った。

少し古いが、丁寧に掃除されている白いアパート。そのアパートの一階に上がり、扉を開ける。そして荷物を置くひとつ部屋に入ると

「あ、お帰り」

「…………どう様でしようか」

いや、わかっている。

水色のふわふわした髪をお団子ヘアにまとめた、透き通るような白い肌をした、切れ長の瞳の美少女。彼女の名前は、ディーモン・R・美鈴ミレイだ。

しかし。
しかしだ！

「何でお前がここにいる」

「へ？」

まるで、こなのが当然のような言い方で、彼女は間抜けな声をもらした。

数秒たつた後、彼女はあー、とか言いながらここに来たまでのいきさつをしだした。

「さつき伯父さんがね、『あれが用意できなくなつたんだよ。伯父さん最近多忙でさあ』なんてほざきだしたから家出してきたのよ」「いやいや、間違ってるぞ！ってか『あれ』ってなんだよーなんでそれごときで家出をするー？いや、家出をするなとは言わない。家出をするなら勝手にすれば良いーでも何で俺の家なんだ！？」

「そんなの決まってるじゃない」

彼女はいつも眞理のよつないい振る舞いで続ける。

「あんたしか知り合いかいないのよ」

「……」

なんてかわいそうな奴！と思つたのは口には出さない。

しかし彼女の言つ『あれ』や『これ』とは何なのだろうか。先ほどから伯父の……学園長の口那との会話に出てくる。彼女が家出するほど大切なもののだらうか？なんて、彼はちょっと真剣に考えてみたりする。

まあ、そんなことはビリでもいいのだが

「本氣で泊まる気か？」

彼にはそれが心に引っかかる仕方がなかつた。

き…金髪美女

太陽も完璧に沈み、付が輝く時間。

暗い、夜の時間。

時刻は一時をまわろうとしていた。

部屋では俊也と、^{ミレイ}美鈴がスヤスヤと眠りについている。

ガシャアアアアンツツツ！

突如、大きな音を立ててガラス窓がわれた。

「俊也！」

「…………んだよ」

「ごめん、巻き込んだ」

美鈴は飛び起き、まだ眠さの残つてゐる俊也に声をかける。
彼女は、ガラスの破片を見て、悲しそうに謝罪した。

数秒たち、俊也は割れたガラスを見つめると……無残に割れている。
もう、一般人には修復不可能なほどに。もう一度言つと、このアパートに澄む条件が問題を起こさない、なのだ。

「…………はああああああああ！？何で割れでんなどよ！？」

ガラス窓が割れたことによつてすつきりと目が覚めたことを確認した美鈴は、俊也の腕をつかみ、ものすごい速さで走り出す。
なんだよ、そう言つ事も許されない沈黙が続き、彼らは港の使われ

ていない倉庫まで走った。

「……っはあ」

彼女のあまりにも速い走りに、少し息が乱れる。やつと、どうしたんだ、そう聞こうとすると今度は

「よくここまで逃げてきたものだ。まあ、ティーモン家の跡取りともなれば、それくらいはできるだろうが」

なんていいいながら金髪の女が空から降つて来た。

金髪でかんざしを頭にとめ、黒いマントのよひつなものを羽織つてい

る。

彼女は地面に着地すると、マントを脱ぎ捨てた。

「……」

絶句。

やばい。やばいぞこれは。

彼はそんなことを考えながらも、金髪美女の体を見る。

……出るとこひね出で、締まるところは締まるところ女性の誰しもが憧れるような体つき。

しかもその上、胸元が大きく開いた、黒い露出の多い服を着ていた。彼女の服の胸元は引き裂かれたような跡を残しながら、ギリギリ見えないような大きさで開いていて、へそを出し、右側の足は膝まで。左側の足は太ももでジーンズと思われるズボンが裂かれている。

そしてハイヒールをはき、まだ若いたぶん俊也たちと同じ年ぐらいだろう。といつのに、大人の女性というオーラを存分に出しきつっていた。

「え…金髪美女……」

口元がゆるむと同時に、そんな言ひてはいけなかつたような言葉が漏れ出す。

「貴様。私を愚弄するのか！？」

いや、愚弄どころか、全世界の女があなたの体つきに愚弄されてしまうけど！？

と、良いたかつたのだが、金髪美女は、この言葉があたかも自分を汚す言葉のように怒鳴つたため、やめておいた。

すると今度は隣にいる爆弾女が俊也の足をガツンッと勢いよく踏む。

「奴は敵よ！」

と、彼女は小声で叫んだ。
もちろん痛さに耐えられなかつた彼はその場にうずくまり、足の痛みを消そうと踏ん張つている。

「～～～っにすんだよ！？」

やつとのことで声を出すが、聞く耳持たず。

うおい、俺の話を聞けええええええええええ！といつ彼の心の叫びは気にも留められず。

美鈴と金髪美女は、一人の世界にいつてしまつた。

「これで13人目よ？私を倒しに来たのは、飽きないわね、あなた達も」

「その十三人と私と一緒にしてくれるな。奴らはただの下つ端に過

ぎない」

「あの赤髪の女は？」

「？……ああ、あいつなら任務失敗で」

「殺したの？」

「……ああ」

なんて、ちょっと物騒な話をしだす一人。

かすかに、美鈴から殺氣が出ているのがわかった。たぶん、常人なら気づかない程度の、少量の殺氣。しかし美女はその殺気にすぐに反応して、美鈴との距離をとる。

「……その金髪美女。下つ端なんでものじやないぞ」

俊也は、美鈴に気をつけろと、遠まわしに言つ。

それに気づいたのか美鈴は微笑してわかってる、と一言呟いた。邪魔になるであろう匂やは少しはなれたところでアグラをかき、ふあああ～とあぐびを一つして彼女達を見据える。

海の、塩の臭いが一瞬強くなつたとき、二人は一瞬にしてお互いの距離を詰めた。

キィインッ！

美鈴の拳銃と、美女のかんざしが強くはじきあう。

「あの簪かんざし武器だつたのかよ…、なんて思うほど、武器としては見えなかつただの簪もどき。しかしそく見てみると簪の先は鋭くとがつっていて、まるで刃物のようだ。」

「くつ……」

美鈴はわき腹に鋭い蹴りをくらひ、短い悲鳴を漏らす。

「加勢しようかー？」

「いらないわよーむしろ邪魔！」

俊也が聞くと、彼女はすぐに罵声付で返答した。

俊也はあつそ、と小さくはき捨て、二人の戦いを見守る。

美女が簪で攻撃したかと思うと、わき腹に拳や蹴りが入る。拳や蹴りが入ったかと思うと、簪での攻撃が美鈴を痛めつける。

彼女はフェイントをかなり上手く使いこなしていた。

決して美鈴が弱いわけではない。

彼女は常人以上の速さで動き、攻撃を繰り出している。クラスで分けたらB。もしくはAに入れるかどうか、そんなレベル。

よく馬鹿な発言をするところのすげい速さで彼女に拳銃を突きつけられる。

俊也や、他の奴らがよけきれないようなスピードを軽々と出せるほど、彼女のスピードはすさまじく、命中率も高い。パワーよりもスピードで闘ってきた人間なのだろう。

しかし美鈴のスピードを惑わせるような動きを美女がする。彼女は飛びぬけて反射神経がいい。それはこの戦いを見ていてなんとなくわかった。ゆえに最初に出てくる攻撃を重点的にいなそうとするから、フェイントなのに体が勝てに反応し、次の攻撃に間に合わない。たぶんだが、美鈴は長期戦は得意ではない。息が乱れてきていた。

「つはあ……くつ……」

「ディーモン・R・美鈴……まだまだ完成してはいのだな」

「…………どういうことつ

「まだ完成していないとなれば好都合だ。今のうちに、死んでもらう……！」

美女はそう叫んで、簪を振り上げた。
と、同時にわき腹へと拳を進める。

「美鈴！ 左ガード！」

「！？」

突如俊也が叫ぶ。早く美鈴が反応できるよ！」
その言葉に反応して、美鈴は左のガードを固める。さすが美鈴だ、反射神経はいいな、と彼は思う。すると美女は止めきれなかつたのか、拳がそのまま左脇腹へつままりは美鈴がガードしたところへと拳を突っ込む。

「なに？」「

美女は初めてガードされたことにとまどいつつも、いつたん距離をとり、もう一度フェイントを仕掛ける。左足で蹴る動作をして、簪を見えない死角から振り下ろす。

「右上、簪！」

「…………！」

また、俊也の声で美鈴がすばやく反応する。

能の回転が速いのか、彼女は言われたことをすぐに理解する。
また、美女の攻撃を防ぐ。

その繰り返しをそれから五回続けた。しかし全て俊也の言葉により美鈴は防いだ。

「くつ……仕方がない」

なんていいいながら美女は後ろに飛び退き、

「私の能力を見せてやろう」

そう、美鈴と俊也に向かって告げた。

騙されたあああああ！

突如、彼女の周りに先よりも大きな殺気が流れた。
そして視線が、美鈴からアグラをかけて座っている俊也に向けられる。

「は？え、俺？」

「貴様は美鈴^{じのおんな}と闘うのに邪魔な存在だ。先に消えてもいい」

「ちょ、俺マジで弱いから！むしろいてもいなくとも同じ存在だからー空気みたいな奴だから！」

「何をゴチャゴチャと言つている。立て！」

「そつそつ、俺空氣…って、はあああああああ！？何で戦いに俺が巻き込まれるんだよ！一人でよろしくハアハアやつてればいいだろうが！三人より絶対一人のほうが楽しいからな！」

なんてわけのわからないことをツラツラと並べ立てて俊也はアグラをかいたまま、少し後ろに後ずさる。

刹那。

ツウー、と頬が斬れ、そこから流れ出る血が頬をつたる。

「えっとー、おい美鈴！何で俺が闘わなくちゃいけない雰囲気になつてんだよ！」

「知らないわよ！あんた何かしたんでしようー！」

「してない。断じてしないぞ、俺は！」

とりあえず話を美鈴にふってみるが、美女は動く気配はない。いや、先程頬に傷を負ったときも、彼女は動いていなかつた。体を動かさずに相手を切りつけられるような能力。それも、こちらが動くと切り刻まれる仕組み。

不用意には動けない。

そう確信したとき、金髪美女の方からナイフが飛んできた。

「ちょ、これ動かなくちゃいけなくねー？ちょっと美人さんそれはひどいぜ。いたぶつて殺すの趣味だつたりする！？」

なんて聞きながら、彼はナイフをよけようとする。

ヒュン、と音を立てて飛んできたナイフはよけた。しかし今度は左腕が深く切れていた。

「つづく…」

彼はちいさい悲鳴をあげながら、深く切れた腕に目をやる。細い傷跡が残つていて、肉が多少なりともえぐれている。その上、血が垂れ流れていた。

何なんだ？こちらが動くと切れるような能力？カマイタチ……は強い風が起ころからありえないし……。細くて頑丈で、その上深く切りつけられるもの……だああああああ、わかんね。細くて

細い？彼は何を思つたのか、もう一度、傷口をしつかりと見つめる。

細くて、真直ぐでくつきりとできた線。

もしかして……。そう考えていると、ナイフがまた投げつけられてきた。

「セツコツ」とかよ……」

彼はニヤリと笑んで、自分の体の前にゆっくりと手を擧げる。傷は……つかない。

それを確認すると、近距離に来ていたナイフを軽々と素手で叩き落とした。

そして同じ状態で動けずにある美鈴に向かつて叫ぶ。

「美鈴！お前の拳銃オリハルコンだつたよなあー！」

「そうだけど……」

「ちよつと貸せーすぐに返すからー！」

彼は少し笑んで、言い放った。

すると美鈴は彼の笑みになにかビビビッときたのか、素直にわかつたわと言つて、拳銃を投げる。

「……っし。じゃあ、反撃といきますか？」

彼は一人呟いて、オリハルコン製の拳銃を振り回す。所々腕や体に傷がつくが、今はそんなことを気にしてはいられない。そしてやがて振り回すのをやめると、腕から垂れる血を、拳銃につける。すると……

「これが正体だろ」

「……くつ」

血で赤く染まつた、細い糸が姿をあらわにする。

そして銃口を美女に向けて、容赦なく彼は撃つた。

ガーンツツ

銃声を響かせて、弾丸が美女に向かっていく。

「へそつ」

美女は小さく毒づいた。

そしてうつむいた……と思いつきや

「なんてな」

言い放ち、腕を擧げる。そして指を起用に動かし、糸で弾丸を巻き取つた。

「おーおー、そりやねーゼジヨニー」

美女の綺麗な糸ざばき（？）によつて綺麗に巻き取られた弾丸は、口ロン、と地面に落下した。

さすがにそこまで予想していなかつた俊也は冷汗を額に流しながら、美女を見据えた。

すると美女は弾丸を落とした状態のまま、糸先が美鈴に向かつて飛んでいく。

「美鈴ー！」

叫びながら俊也は拳銃を投げる。が、届くのが遅い。

今だ糸が辺りに張り巡らされている美鈴は動くこともできず……。

「へそつ。『vvv第一リミッター・解除vvv』ー。」

咳くと同時に、彼は普段の彼では到底できないような速さで走り出す。

もうすでに美鈴の目の前にいる美女は、美鈴に向かつてフェイントを仕掛けていた。

が。

美鈴はフェイントにかかることなく、ギリギリで受け取った拳銃で美女を殴り飛ばした。

「がああ……っ」

うめきながらこちらに向かつて吹つ飛び美女。

それを見て俊也は「は？」と、一瞬思考停止したが、すぐに我に返り、飛んできた美女の首に蹴りをいれ、今度は空中に向かつてとんだ美女に上からかかと落としを腹部にくらわせる。

「ぐ……あ」

小さくうめき、地面にたたきつけられた美女。

それをジーツと見ていた美鈴に、俊也は怒鳴る。

「何で最初手え抜いていやがった！しかもこのフェイントかわせません、みたいな行動しくさつて！」

そう、彼女は一人でも軽々と美女を倒せるだけの力を持つていた。俊也が叫ぶのに対して、美鈴はつっけんどんに言い放つ。

「だつてあなたの実力見たかったんだもの。仕方がないじゃない」「ガツテンムウウウウウツッ！」

わけのわからない叫びを上げて、彼は頭を押さえ込む。それを見てクスッと笑った美鈴は、

「まあ、戦いに参加するように敵を動かしたのは悪かつたわ。でも、なかなかあんた本気出そうとしないし。むしろ「俺関係ない」とか

言つて逃げようとするんだもの。いつも困ったわよ」

「んだよー！あー、やっぱ参加しなきゃ 良かった。参加なんてしたから

」

「でも、なかなかの実力ね。本気を出せばもうといける。なぜあんたが制御しているかはわからないけど……」

「ん、なんか言つたか？」

「なんでもないわよ」

「あ、そう」

俊也は美鈴の策士っぷりに尊敬を通り越して怒りさえ覚えながら、夜の街を歩き帰った。

駆けられたあああああー（後書き）

うわ、戦い終わったやつがいましたよ。さうじょひ……。

お気に入りに入れて下さった方、どうもありがとうございます。
自分も飽きられないよう頑張りますので、よろしくお願ひします。WW
感想や評価をいただけると幸いです。

「ゴホッ、があ……ゲホゲホッ」

彼は誰もいない暗闇で、苦痛に耐えていた。
咳とともに吐き出されるどす黒い血のかたまり。
体のきしみを感じながらも、彼は苦笑する。

「一分も解除してねえのに、副作用はあるんだな……」

なんて咳きながら、アパートの壁に手をつき、彼は苦しそうに息を
潜めて吐血する。

ああー、やつぱりあの時リリシター花序しなきや良かつたな、なん
て彼は先ほどの戦いを思い出しては思つた。

数分たち、少し痛みが治まつてみると、彼は口元についた血を腕で
ぬぐい、自室へと戻つた。

暑い……。

無性に暑い。

何か火のかたまりのよつなものが体の近くに密着させられている感じがする。

体が、水分をほしがつてゐる……。

「……俊也さん」

心なしか、俊也を呼ぶ声も聞こえ始めた。

そろそろ死に時だらうか? なんてことを俊也は考える。

「俊也さん、起きてください」

いや、これは完全なる死に時の警告なきがする。

俊也は開きたくないまぶたをうすうす一く開いて、声をかける人物を見る。

「……あ、起きました?」

「……イエ、まだ寝ています」

……見たく無いものを見てしまった。

いや、いつもの朝は見ていても別に不可解でもなんでもなかつた。しかし、今日は少し違う。

なんというか……その……彼女の笑みが、いつも以上に恐ろしい。

そしてその理由がわかつてゐる自分も慰めてしまふ。……、なんて彼は考
える。

原因は簡単だ。

まず、美鈴という名の美少女が彼の部屋で寝泊りしていたこと。
次に、彼ら一人とも、体に少なからず外傷を負つていてのこと。
あとは……。わからん。

「俊也さん、そろそろ起きてくれないと、さあやりますよ。」

「おはよう」

「はー。おはよう」

瞬時に起きた俊也の前にはもちろん火の玉と一緒に悠里が笑みをいつそう深くして座つており、その後ろでは田舎がせている美鈴の姿があつた。

「で? どうしたんですか?」

「え? と? どうしたと問われると? なあ?」

「ちよつと、何でこっちに話題をふるのよ。…… わあ?」

俊也が美鈴に話題をふる。美鈴は最初俊也にしか聞こえない程度の大きさで俊也に文句を言つて、その後あさつての方向を見つめてなにがなんだか、みたいな表情で言つ。

それに悠里の笑顔は恐ろしく美しいものと変わり、彼らに向かって言つ。

「とにかく、今日は時間がありません。学校から帰つてきたら後々尋も教えていただければ結構です」

「え、今尋問つていわなかつた? 言いかけたよな! ?」

「氣のせいです」

「……そ、そうですか」

悠里の笑みに圧倒されながらも、三人は登校した。

やつとのことで悠里から逃れると、彼らは重いため息をつきながらクラスの扉を開けた。

そこには

「「づつ」」

一人の声が重なる。

クラスはいつもよりも微妙な空気が流れていて、妙だな、なんて思
いながら扉を開けたのが運のつき。

目の前には、黒髪ロングのババア……学園長がいたのだ。いや、実
際には三十歳らしいが、彼らは彼女のことをババアと定着させてい
る。

「げ、とは何だ。げ、とは。せつかくアタシが自ら赴いてやつたと
おせむ

「いつの間に」

なんて、軽い口調で学園長は言い出す。しかしそれに一人は

「「来なくていいわっ！…」」

シンクロ度100パーセントのような見事な重なりっぷりで叫んだ。

実を言ひ普通の高校を受験しようとしていた俊也を無理やりこの学園に入れたのもこのクソバ…学園長なのだ。しかもこのクソバ…学園長との出会いは最悪なものだった。

それにくわえ美鈴もこの学園長やその旦那と何かあつて家出したのだろう。

つまりは一人にとって嫌な人物この上ない。

「つれないねえ……せつかく旦那に頼まれた『あれ』を用意したと言ひのに」

「本当…？」

あ、食いついた。

つてか、『あれ』ってマジでなんだよー？なんて心の叫びも聞いてもらえず。

それを見ていた坂上や信条は学園長のほうへ歩み寄つて、

「学園長、お久しぶりです」

まず、信条が挨拶する。

それにふむ、なんてなんともババア臭い口調で返事を返す。

その後珍しくというか、絶対ありえなさそうな行動を坂上がとった。

「クソバ……学園長。お久しぶりです」

なんていいながら、笑顔で握手を求めたのだ。
それに学園長は露骨に繭を潜めながら

「クソババアとはいい度胸じゃないか。握手して、それからビリするんだい? 年齢早めて殺していくとするんだい? ええ?」

「ツチ」

「舌打ちしてんじゃないよ!」

学園長の突っ込みもむりおれたな、なんて裏で口々にと話すクラスメイト達。

この学園長は意外と慣れ親しみやすい、なんて理由で生徒受けは良い。しかし学園長に何かしら恨みのある奴も多く、そういう連中からは嫌われている。

ちなみに俊也、信条、坂上はもちろん後者。そしてその言葉を聞いて繭をよけいに吊り上げながら俊也、坂上、信条、美鈴に向かつて告げた。

「実はあんた達にやつてほしい依頼があつてねえ」

「「「お断りしまーす」」「」

「…………」

一致団結。

「Jのまま断り続ければよかつたのだが

「美鈴、Jの依頼を受けたら『あれ』を増やさひ」

「やります!」

一人撃沈。

「坂上、依頼主は若くてたいそうな美人だぞ？」

「お受けします」

「…………」「…………」

だめだ。勝てる気がしないつ。

……いや、まだ信条が残っている。一人でなんとかと彼が思つていた矢先

「藤堂、受けなければ悠里にあること無いこと……」

「全力でやらせていただきます！…………って、しまったああああああああ！あああ！俺が落とされたあああああああ！」

不覚……。

こつそりと信条の方を見ると、やれやれ、と言つたような表情で苦笑していた。

そして最後に学園長が信条の耳元で何かを耳打ちして……

「…………学園長も人が悪い。それでは僕はやらなくてはいけなくなるでしよう？」

「ふふふ……」

なんて、話がまとまつてしまつた。

恐るべし、学園長。

帰国子女ーー?

依頼。

それは簡単なものだつた。

今日転入してくる帰国子女を、三日間校内の案内や言葉の世話をす
る と、 いゝもの。

学園長もそういえばすぐに俊也たちは納得したものの、ただお願
いするのはしゃくだつたそつだ。

それにまともに外国語を話せる美鈴と、人間関係の良い信条は必
須で、そのおまけに俊也と坂上も巻き込んでやひり、程度の考えだ
つたらしこ。

「「くわつ。あのババアめーー!」」

俊也と坂上は同時に毒づいた。

「坂上、今度あのババアに会つたら迷いつきつ握手……いや、抱きつ
いて來い」

「抱きつぐのはイヤだが、あのババアの息の根止められるんならや
つてやるよ。最速で生命を早めてさつとと寿命をきかせてやる」

「頼もしいな。初めてお前を良い奴だと想つたよ

「ふつ……」

なんて彼らは馬鹿げた会話をする。

しかし、その瞳には確実に遂行するという信念によつて毒されていた。
絶対に殺す！と彼等が呟いてゐる。

突如、教室の扉が開き、黒川が入ってくる。

「今日は転入生を紹介します」

その言葉に、きやああああああああああああ？なんていう女子の雄叫び（？）があがり、質問攻めとなる。

一 転入生は男？女？

「ビニル來り」

「なんと、帰国子女だそうです」

「おたか」

卷之三

しかしそんな俊也の心の疑問は誰にも届かず、黒川が、

とによつて不機嫌になつていた男子共も『帰国子女の金髪』という言葉に舞い上がつていた。

「入ってきてください」

黒川のその言葉と同時に、入ってきた金髪美女
つて、はい？

そこには淡い緑色の超凜学園の制服を着た、先日闘ったばかりの金

美女だつた

彼女は黒板に綺麗な字で『田中』と書き出した。なんとも平凡な名

前だ……。

そしてその田中の下にカタカナで『ソフィア』と書き、クラスを見回す。

「初めマシテ。田中ソフィアと言いまス。どうぞよろしく」

少し片言で、綺麗な大人びた笑顔をまわりに振りまいした。
そして自己紹介が終わり、クラスの拍手が鳴り止むと

「じゃあ、ソフィアさんの席は　　あ、ちょうどあそこがあいて
ますね。藤堂君の隣で」

「はい」

そういうつて俊也の隣まで来たソフィアは、彼の顔を見るとあからさまに顔を引きつらせ

「よ、よろしくお願ひします」

彼女は初めてして、なんていつてきた。
あくまで他人のふり、か。

そう確信した俊也は少し意地の悪い笑みを浮かべて

「初めまして。よろしくな、美人さん」

ガニンッ！！

突如、ソフィアは俊也の胸倉をつかみ、

「貴様！私を愚弄するのか！？」

叫んだ。

シーツンとなつたクラス。

それにハツと気づいて、ソフィアは氣まずい雰囲氣で

「えつと……毛が、ついていました円?」

「いつ……サンキュー」

ブチツと俊也の毛を抜くと、皆に見えるように毛を高く上げた。
そこまですか……、と彼は内心美人さんと言つたことに公開しながら、色々と考える。

まあ、しかし、この美人さんがまさか同じ年だつたとは思わなんだ。
これからも色々と大変そうだ、なんてなんとも親父臭いことを考える俊也だった。

俺関係なくないですかー！？

ソフィアを坂上、信条、美鈴、俊也の四人で校内を一通り案内した後坂上と信条が用事で何処かへ行ってしまったので、俊也たちは彼女のリクエストを聞くことにした。

「あと、どこか行きたい所は？」

すると彼女はぶつめりまづい

「誰も来なくて三人で話しえできる場所」

なんて指定してきた。

それに一瞬俊也と美鈴は顔を見合わせ、相談室へと足を運んだ。

相談室。

そんなのは名ばかりで、ただ無駄に良いソファーが一つおいてあり、テーブルが一つ。

あまり人も入らないので少しほこりっぽいただの部屋である。その部屋の窓を少し開けて換気をすると、すぐにほこりっぽさは薄れた。

そこのソファに三人が座り、ソフィアの話を聞く。すると彼女は深刻そうな顔で

「率直に言つ。貴様達は狙われている」

「…………」

「

いや、確かに率直だけど……なんて彼は思う。しかし美鈴は何回も狙われていたからなんとなく狙われているのはわかる。理由は知らないが。でも、俊也が狙われる理由がないのだ。

「えっと……美鈴は狙われている、の間違いないのか？」

「ああ。貴様達、だ」

「…………なんでだ。俺狙われる覚えが全く言つて良いほど無地だぞ

!

「なにを言う。貴様は私と戦つたであろうが。それにあの赤髪の女とも。一回も自分の組織のものと美鈴を守りながら闘われたら敵視する。誰かが闘うときは……そうだな、社員辺りが監視しているのだ。美鈴と闘つた十三人が下つ端なら、私はアルバイトだ。アルバイトが負けたら、仕事に慣れたアルバイトか、社員見習い辺りが出てくるのは当然だ。次は私よりも強い奴がお前達一人を襲う」

「お前のせいかあああああああああっ！！お前等が俺を巻き込んだから俺のライフがめちゃくちゃになつたんだろうが！」

俊也は思いつきり叫ぶ。

しかしそんな叫びは相手にもされず、女子二人が話しこみ出した。美鈴はソフィアと同じくらい深刻そうな顔つきでソフィアに問う。

「ソフィア……。あなたは何で生きてるの？奴らは使えない奴は皆殺しにすると聞いたわ」

「決まっているだろう。逃げてきたんだ。つまりは組織のことを少しだとはいって、知っている私も標的に当てはまっている。でも私はやることがまだ残っている。絶対に死ねない」

ただの凡人じゃね？話せばわかつて

「…………ですよねー」

そんなことを話し、最終的にはずっと追われていた美鈴に加わり、逃亡者のソフィア、そしてなぜか巻き込まれただけの俊也もソフィアの所属していた組織に追われるはめとなつた。

彼女はその後、辺りを注意深く確認しながら、組織のことを話そうとする。

ヒコン

と、音を立てて彼女の綺麗な金色の前髪が切れた。

「…………他言無用らしげ」

「…………ああ」

「でも、今のは見えなかつたわ。どこから攻撃を……」

美鈴がそういうて窓の外を見る。
しかしそこには誰もいなくて。

それであー、めんどくせえ、何で俺が巻き込まれなくちゃ いけねえ
んだよ、なんて彼は考えながら扉のほうを見ると、一瞬、ほんの一
瞬だが、何か物陰が動いた気がした。

それに彼は、ソフィアの組織の奴だつたら非常にまずいなあ、と思
う。

しかしレーリーに姿を確認されるような奴だつたら、幹部とか、社員
じゃねえんだろうなあ、と彼は思つ。そして思つてから今度は上か
ら視線を感じて、上を見上げる。

しかしそこにあるのはただの天井で、他に変わつたところなど……

「あ」

「どうしたの?」

「…………」

あつた。

唯一変わつたところがあつたことにいろんな意味で彼は驚く。

天井の隅から変なバズーカ砲みたいなものがちょっとだけ飛び出で
いることに彼は驚く。

耳をすまえると盛大にバシャバシャパシャパシャバシャパシャなん

て、カメラのシャッター音が聞こえてきて。

「つねにーそこで何してんだああああー?」

俊也の叫びに美鈴たちは一瞬びっくりしてこっちを見つめる。

天井のバズー力砲みたいなカメラと思われる者を抱えた人物も、彼の声に一瞬ビクウつとして、またバシャバシャパシャパシャパシャ、なんて小さな音を立ててシャツターをきりまくる。

我知らぬ、を通り出した人物に若干感服しながら彼はもう一度

「そこの天井にいる奴！」

と、声をかけると、スヌーニッとカメラが天井に隠れていつて……。

「逃がすかああああああーーー！」

彼は叫びながら天井の微妙な隙間に目をやる。
しかしそこにはもう誰もいなくて。

その行動からして、あまり危険人物ではないんじゃないかな、なんて彼は思う。

下を見渡すが、誰もいなくて。

仕方がないので美鈴やソフィアの方へ目をやると、ソフィアは何一
人で騒いでるの？見たいな冷たいまなざしをこちらに寄せ、それに
反して美鈴は視線を逸らし、プツツとか声をもらしながら笑いを必
死にこらえている。

「おーい美鈴。お前気づいてんだろ?」

「フフフツ……え、何が？アハハハハツ」

「気づいてんじゃねえか！何一人で笑いこらえてんだよ！？」

「くく……ひつ…だつて……盛大に叫んだつてあつちが顔出すはずないじゃないつ。気づいてません、知りませんっていう感じのオーラ出しておけばいいのよ」

その言葉に、気づいていなかつたソフィアが

「やうだぞ。お前は頭がかたいな」

「お前は気づいてなかつただろおがああああああああああつー？」

なんて叫ぶはめになつて。

その日俊也の喉はいつも以上に痛かつた。

「…………」

俊也は、無言で校舎を歩いていた。

パシャパシャパシャパシャ。

「…………」

無言で、視線とシャッター音に突っ込みそうになる自分を必死に我慢させていた。

彼が歩くと視線の主は一定の距離を保つたままついでまわ、彼が止まるとき、視線の主も止まる。

そのため彼は不自然じゃないように止まつたり歩いたり、知り合いと話をしたりを繰り返しながら、校舎を歩きまわっていた。

なぜかこの人物は気配を完璧に消しているわりには、カメラが簡単に見つけられる。

しかしカメラを見つけても、この人物の体は見えない。ある意味すごい奴なのかもと、彼は思つ。

そしてまた無言、彼は歩き始めようとする。

「…………」

「だああああああああああああああーもつ無理！絶対無理！おいやーの
カメラ野郎でてこーー！」

叫ぶように言うと、ビクウツツーとカメラが一瞬動いて、スヌー^トとさがっていく。

「おはよう！」

呼んでも、彼……か、彼女かもわからない人物は、逃げ腰にさがつていく。

とか、彼は心の中で叫ぶ。

「俺の写真好きなだけ撮つていいいから話をさせろー！」

はたから見ればただのナルシスト。

実際彼は「これを言おうか言いましかを考えて何度かチャンスを失つたのである。恥ずかしさに。

カメラを持った人物は彼の言葉を聞いて数秒停止し、さつと木の陰から出てきた。

淡い緑色のカールのついた短髪に、細身の体。
彼よりも、年下だと思う。

なぜか背中には長い射撃銃が携えられていて。

彼女は無表情な顔でこちらを見上げ、

「自惚れないで下さい。私は別に写真に釣られたわけじゃないですから。友好的に話をしようと思つただけですから」

なんて凛とすんだ声色でいいながら、カメラを構える。

そしてパシヤパシヤパシヤパシヤと、シャッターをものすごい勢いできりだした。

「思いつきつられてんだろ？がああああああああああああああ！」

叫ぶが、彼女は無表情のまま写真をとり続け、返事をしてくれない。

だあああああ、めんどくせえ。これじゃあ話しどころか盗撮され終わりじゃね？そんなのありえねええええええええええ、俺の勇気を返せ！とか、彼は考える。そしてこの状況を開拓できる策を考える。

「…………」

策を考えるが、なにぶん彼の頭は策士用に作られてはいないのだ。

まあ考えていても一生答えは出でこなさうなので彼はとうあえず質問をする。

「名前は？」
「すずはらい
鈴原」
「郁」

返事が返ってきた。

先程言った『撮りせてやるから話をさせ』といつ葉を守つてくれてこらしこ。

とりあえず質問攻めにする」とした。

三三七

「秘密」

「何で俺の写真を撮る？」

必要だから

「
秘密」

スリーサイズは?

上かになむ

「アーティストの死」

「いや、いい！ 聞きたくない！ 聞いたら…」

がする。周囲の信頼とか」

そういうながら、周りを見回す。

いだろう。

彼女もあるいみ爆弾女だ

彼は、大きく深呼吸をしてから鈴原郁……彼女に言った。

……と/orあえず、お前の行動はなに?」

隱密行動

「しつかり氣づかれてんじやねえかあああああああああああつ！もう隠密じやねえよ！しかも無駄に氣配の消し方上手いのに体見えてたら意味ねえだろうがあああああああああああつ！――！」

はあ、はあ…。

ひとりしきり叫んだと、じるで彼は周囲に目をやる。

なんだコイツは。

何独りで叫んでるんだ

ばうし

言葉に出したりしないぶん、よけいに痛い。

「ぐう…ああーーーもうーーじつち来い！」

彼はなにやら考えた後、郁の細く白い腕を引っ張り出した。不意の出来事で、彼女の淡い緑色の髪が揺れる。

それを見た周囲の田線が、きつくなる。

も、

あいつ女の手を無理やり連れてどこへこゝへもーー?

あんな美少女に何をする気だ!

くそう、あの男は何を考えているんだ。あの美少女を……まさか強姦!?

……なんて言葉が田線だけでおくれてくる。
もう痛いのなんの。

「いいから消えててしまいたい」

俊也は小さくつめこて、その場から逃げるよつ……いや、逃げた。

「で。周囲の目線が怖くて私のところへ連れてきたと？」

「おっしゃる通りです」

ふわっとした水色の長い髪を今日は一つに縛った彼女、美鈴は腕を組み、正座して面目ない、と付け足す彼と、彼の隣に右手をつなぎだまま　　といふか、つかまれたままの淡い緑色の短髪カールの少女に目を見る。

ずっと無表情。

そしてあいている左手でカメラをいじりまくっていた。たまに腕が背中の射撃銃とぶつかり、カチャと音を立てる。

俊也の方を見ると、彼は目でじうにかしてくれーとメールを送つていた。

それに彼女は大きなため息をつく。

そして彼女は小さな頭にたくさん詰まつた情報を探し出す。

鈴原郁。

14歳。

つねに射撃銃とカメラを持ち歩く、射撃の天才。
気配の消し方も一流で、一度狙つた的を外したことはないんだとか。
しかし気配の消し方は一流でも、自分のもつカメラを上手く隠さないことが玉に瑕。たまきず

そんな彼女が、どうして俊也に付きまとい、彼の[写真]……つまりは情報を集めようとするのだろうか。

美鈴はマジマジと郁を見据える。

その視線に気づいた郁が美鈴を見据え、

「…………あ。もしかして、美鈴…………さんですか」

なんていう。

それに美鈴と俊也は

「「氣づくの遅つっー!?」」

同時に叫んだ。

無表情（後書き）

長らく更新していなかつた割には短めです。
申し訳ない……。

じじじ、次回にじこ期待！？（泣）

「…………あ。もしかして、美鈴…………そんですか？」

「…………ええ、まあ」

美鈴が渋々答えると、今度は無表情だった郁の繭がピクッと一瞬だけ動いた。ただ俊也の見間違いかもしれないが。

俊也はずつとなれない正座をしていたために、さすがに痺れてきた足を崩し、立ち上がる。

その際になぜかつかみつけてしまった郁の手を離した。

あれ？ 女の子と手つなぐとか何年ぶり？ うう わ、さりげなくハードル高ええええええ、とか、彼は内心ちょっとウキウキで立ち上がる。すると彼の心を読んだのか読んでいないのか、いや、絶対読んだぞおーつて叫んでもおかしくないような、鋭い目つきで美鈴は俊也を軽蔑した。

「…………スマセン」

「よひじー」

なぜか彼はその鋭い目つきを送つてくる美鈴に対しても謝る。

そんな二人のやり取りを見ていて、郁は無表情でこんなことを言い出した。

「仲いいんですね」

今のジンを見ていれば仲がよいという発想にありつくるのだろうか。郁の思考回路はわかりやすそうでわからない。いや、もう全然わからない。

そんなことを考えていのうちに始業のチャイムがなり、彼女は「では、これで」と言いながら自分の教室に戻るため、部屋を出た。

「授業始まつちやつたぢやないのー。」「え、それ俺のせーじやなく…わざああああああああああああー。」

なんて仲の良いセリフが聞こえてくる。何をしたのだろうか？

彼女は首に下げたカメラで撮った写真を見る。

今日撮つた写真。

藤堂俊也の写真

そして先程部屋で撮つた写真。
ディームン・R・美鈴の写真。

彼女はその一種類の、あらゆる角度から撮つた写真を見て、無表情だつた口元を少しゆるませ、咳く。

「……それで、彼らに私が負けることはありえない」

「えー悠里さんっ！」

彼は言つ。泣き声で田の前にいる、すでに泣き始めてしまった桃色のやわらかそうな髪を二つに縛った女性に向つて。

「う……ひぐ……待つてって、言つたじゃないですかあ……」「いや、本当にコメソン……えっと……携帯、見てなくてさ

彼はとつて思つてついた言い訳を使つが、

「直接言つたのになんで携帯なんですかー……」

「……」

玉碎。

いや、だつてさ?

別に忘れていたわけじゃないんだぜ? 記憶にないって言つたか、なん
といふか、俺に非はない! 断じてないぞ! なんて彼は心の中で本音
をぶちまける。

しかしそれを今の状況で彼女に言える勇氣なんて素晴らしいものは
俊也にはなくて。

あー、もう、そろそろ俺死ぬかも。とか、彼は夢現の状態で考える。

「ひど……ですよ……」

「いや、俺には愛する妻子が家で待つてるんだ……」

あ、今死亡フラグ立てた。

絶対戦場で言つたらいけないパターンの言葉を言い訳に使つてしま
つた……

「じめ、今の冗だ……」

そんな彼の撤回を聞かずに、悠里は左手に、青い炎を作り出した。
青い炎。それは温度が高いことを証明する色。炎を使える能力者は
多数あれど、高温の炎を作り出せる能力者は少ない。彼女はその炎
を手で丸く固め、うるんだ瞳を見開きながら彼女は叫んだ。

「さ、妻子……。お相手は誰なんですかー!…?」
「だから違つきやああああああああああ!」

そんな叫び声がこだまする。

しかしそんなお氣楽な日常が、途端に消えてしまつたことになると
思わなかつた。

怪しい事

夜中。

俊也は小さなボロアパートの一室で熟睡していた。
もちろん、ティームン・R・美鈴も同じ部屋で。

俊也は熟睡している。白い、胸元にFIGHT!と書いてあるだけの半そでに、短パンというラフな格好で。

しかしそれに対し、美鈴は違った。

水色のやわらかそうな髪をキッチリと二つに縛り、超凜学園の制服を着て、身構えていた。

超凜学園の制服。

それは淡い緑色のチェックの上着に、濃い緑色のスカートやズボン。まあちょっと趣味は悪いが、防弾の役割もはたしている特性素材。

意外と能力にも強く、それなりに強い術でないかぎりはこの制服を貫通させることはできない。

といつても、所詮は制服。

ちょっと手だれた人間に銃弾ぶち込まれればすぐに穴があく。が、普段着のように柔らかい素材よりも断然ましだ。

彼女はそんな制服を着て、身構える。

ベッドの中に身を潜め、気配を探知しようとする。

もう少しで夜中の一時。

卷之五

バリイン!

突如、部屋の窓ガラスが銃弾によつて割れた。

「なんだなんだ……つてなんだ」「りやあああああー?なんでもまた窓割れてんの!?せつかくおばさん」とつて許してもらつたのにいいいいいいいい!?

彼は、飛び上がってから、割れた窓の破片を見て叫ぶ。
あらん限りの力で叫ぶ。

それはせいか大陸せんから「ハセヤニ」の壁をたたかれるぐらいい。

しかしまた、彼が叫ばなくてはいけない状況に持ち込まれる。バン、と小さな発砲音がして、彼の左目めがけて小さな銃弾が飛んできたのだ。

「盤面に現れるものは、必ず現れる。」

いいからつ、早くよけなさい！」

「ぐはわ」

なんて微妙な会話を成立させつつ、美鈴は俊也の体を強く押した。
そのため、俊也の左目はえぐられずにすんで。

やべええええ、これやばすぎだらー、なんでこんなことになんつてんだよーとか、彼は口ぱくで叫んでみる。
しかしそれに返事をしてくれる人はいなくて。

そしてすぐに美鈴は体勢をなおし、ソファに襲われたときと同様、俊也の手をつかんで走り出した。

力チャ。

小さな音を立てて、彼女は身構える。

満月の夜。

その逆光をあびながら、淡い緑色のクセツ毛の少女、鈴原郁はかまえる。

彼女は首元から常口頃構えているカメラをぶら下げて。両手にはいつも背中に携えている長い射撃銃を持ち構えて。

彼女は呟く。小さく、か弱い声で呟く。

「逃がさない。私の獲物ターゲットになつて逃げ切れた人はいない」

彼女は、小さく呟く。
いつもの無表情で。そつけなく。

しかしその瞳は何かに揺れていた。

それが月の逆光のせいなのか、風で乾燥したせいなのか。それとも他の何かがあるのか。

それは今俊也たちにはわからないだろう。

一瞬ゆれた瞳は、その数秒後には獲物ターゲットを狙う狙撃者のものとなつていた。

怪しい事（後書き）

展開速いですね……。すみません。
それは置いておいて、報告です！

新作を（少し前に）更新しました！題名は「魔術師の機密」です。
主人公最強系です（またあ！？）スミマセン。

描写の仕方がちょっとだけ、「Rの称号」とは違います。主人公そ
んなに呼ばないです。

もしよろしければ、目を通してみてくださいージャンルは冒険です。

パンツ！

短い、少し高めの発砲音が聞こえると、全力疾走している俊也たちの少し横、厳密に言うと俊也のFIGHT!とかいてある白い半そでのわき腹辺りをかすめる。

「かすつたああああああああああ！おい美鈴！俺今日死ぬかも！」

「ふざけんなよ！ 狙撃者だぞ！」
「死ぬわ。それともあつちの正確な弾丸をよけられる技能が今あるんだにある！？」

なし！」

美鈴の呼びかけに俊也は「これでもか、と思わせられるほどキッパリ」と即答した。

しかし、狙撃があつてからすぐに部屋を飛び出してきたので、もちろん足は裸足。

二ンケリードだけならまだしも
利道を走つていて。
なぜか今はほそくされてしたい砂

「気いたら負けよ」

「気にしなくても負けだらうが…」

その点美鈴はしっかりと靴を履いている。

学校に登校するときにはしているローファー。これまた走りにくそうな選択だが、じつは気にしては負けだ。

住宅街から少しほなれた、周りにはほとんど障害物のない、きれいさっぱりな広場のようなところへついた。しかし地面は今だ砂利という現実に、彼は泣きそうになる。

今度は美鈴、何を考えてるんだ？

というような視線を彼女に送ると、彼女はその視線に気づいて

「自分で考えなさい」

と、ひどく妖艶な、艶っぽい意味深長な笑みを浮かべて言つた。

「それ反則うひひひひひひひひひひ…？」

不覚にも田を奪われてしまつた自分が恥ずかしい！と、小声で付け足す。

そして彼女の言つた『自分で考えなさい』という意味について考える。

考える。

考えるのだが、

「ヒント…」

全く彼にはわからない。

それに本当に馬鹿ね、とも言つたそな、見下した視線を俊也に送つてきて。

「ガツテンムカウカウカウカウーー？」

また、意味のわからない奇声をあげる。
と、同時に。

ヒュンッと、風を切る音を立てて三発の弾が俊也のわき腹、右足の
ふくらはぎ、顔面に向かって飛んでくる。

「え、ちょ、俺だけ！？」

そんな彼にしては歯切れの良い叫びをあげ、後ろに後退する。
しかしその行動が飛んでくる弾をよけられるという事につながるは
ずもなく、

ガシッ。

「なつ。がふうつ！」

美鈴が彼の足に自分の足をひっかけ、俊也を転倒させる。
すると転倒したことによって彼は弾丸をよけることに成功した！

「さ、サンキュー」

「あんた、能力使わないと何もできないわけ？」

「御察しのとおりで」

そのかわり、能力を使つた後もなにもできないがな、と彼は心の中で付け足す。
しかしそれを美鈴がわかるはずもなく、彼女は

「じゃあさつさと使いなさいよー邪魔！」

「俺を戦いに巻き込んだのはお前だろ？が！ 責任取れや！ 俺もつお婿にいけない！」

婿にいけない！」

そんなんの知るかああああああああ！わいわいよけなさい！ての！」

俊也の意味不明な言動にあきれながらも、戸惑いを見せず飛んでくる射撃弾を拳銃ではじく。

そして美鈴は今飛んできた弾丸の線を目で追う。

するとの廣場から少しほなれた、かなり背の高い

い
る

「もうあんな所に移動して……。意外と強いのね。さすが、刺客な
だけあるわ」

「あ？ なに言つてんだよ？」

美鈴の言葉に、俊也は首をかしげる。

うな、たくさん意味のこもっている表情で首をかしげるのだが、

「いいから集中」

なんていう美鈴の言葉と同時に、腹筋に強烈な蹴りを入れられ、二

すると元いた、俊也の場所には狙撃された跡があつて。

「…………おいいいいい！俺たぶん刺客に殺されないぞ！その前にお前に殺されるからなああああああ！」

彼は叫んだ。

砂利に勢いよくぶつけた尻を押さえながら、半泣きで美鈴に叫ぶ。

が、そんな彼には目もくれず、美鈴は少しほなれた一番高い木を凝視していた。

助つ人

俊也は激痛のはしつた尻をおさえながら美鈴が凝視しているこの辺りで一番高い木を見る。と、そこには月に照らされ、光っているカメラのレンズが見えた。

「あー……犯人わかつたわ」

「遅いわよ。もっと早く気がつかないとあんたそのうち死ぬわよ」「巻き込んだ当の本人が何を言つ。あと死ぬの勘弁」

いいながら彼はギラギラと光っているカメラと銃口を見る。そして周囲を見渡すのだが。

鈴原郁のよくなか弱そうな少女があの一番高い木に登れるとは思えない。

周りに飛び移れるようなビルもないし。

と、考えているときにバンツッと発砲される。

発砲口を確認していた俊也は少し体をずらし弾丸をよけ、郁のいる木のてっぺんを見据えた。

もう彼女の居場所は一人にばれている。それでもなお、彼女は動く気はないらしい。一歩たりとも動いていない。美鈴はそんな郁を見据え、拳銃を取り出す。

「おい、撃つのか」

「撃たないで私達が生きていられると思つへ。あつちは完璧に殺すつもりなのよ」

「……つけどよ」

「大丈夫。殺しはしない」

美鈴は拳銃を両手でしつかりと握り、銃口を郁へと向ける。
そして。

ダンッ と、短い発砲音が鳴り響く。

真直ぐに、ゆっくりと。

まるでスローモーションビデオを見ているかのように、彼女の弾丸はゆっくりと一直線に飛んでいるように彼には見えた。
そして、郁のほうも。

美鈴の弾丸がゆっくりと、真直ぐに自分の腕めがけて飛んでくるのがわかる。

郁はしつかりと狙撃銃を構え、バンッバンと美鈴へ発砲した。

ゆっくり、ゆっくりと彼女達の弾丸が各自の狙つた的へと飛んでいく。

ガキンッ

大きな金属音を立てて彼女達の弾丸がはじかれた。

一つの弾丸の氣道がピッタリと重なつて、お互ひの氣道を逸らしあつたのだ。

美鈴の撃つた弾丸の氣道にあわせて、郁が発砲したのだ。

「引き分け……」

いや。待て。彼は考えた。

美鈴が発砲した後、郁也も発砲した。

... ﻢﻠﻌﻤﺎت

「...」

彼が言ったときにはすでに弾丸は美鈴の目の前にきていた。

「モウ」

認めざるをえない。

有は天子た

同じ剣道で陰になるようなもつて、一発田を氣道をそらすの[「使い」]発砲していったのだ。

「『＼＼＼＼第一コミッター・解除／＼＼＼』」

走りながら彼は呟いた。

一瞬で美鈴の脇にきて、彼女を思いつきり押す。

ズサア アアア という嫌な音を立てながら美鈴は砂利道の地面に転等した。

しかし俊也は目の前に着ている弾丸に目をむけ、少し体をずらそうと試みるが、時すでに遅し。

彼は目を閉じて、両腕を目の前にクロスをせるよつと上げた。

が。

いくらたつても弾丸は自分に当たらなかつた。
目を開くと自分の目の前に二つの弾丸と思われる、半分に切り裂か
れたようなものが転がつていた。

「は……？」

俊也は間抜けの声をもらしながら、辺りを見渡した。

登場

辺りを見渡すと、月の光で輝く、何本もの細い糸が張り巡らされていた。

動いたら後まで切れてしまひほびに。

こんな悪趣味な助け方をするのは一人しかいないだろう。

「おーい、田中さんやあーい」

そう、田中ソフィア。

田中といふ名字には疑問を覚えるが、そんなことを言つては全国の田中さんに謝らなくてはいけない。

彼は内心ほつとしながらも、ソフォアの姿を探す。

「気安く呼ぶな」

そういうながら出てきた金髪美女。

なぜか超凜の制服を着たままで、全身がびしょぬれだった。

「えつと、どうしたんですか？」

彼女の制服は淫らに乱れ、夏服と言つともあり、ぬれた制服からくつきりと彼女の下着が

「貴様！ どこのを見ているーー？」

「いえ、どこも見ません！ 別に田中さんの下着がクマさんでも俺は気にしないさああああああああーー！」

「「「」」」の姿態があーー！」

同時に美鈴とソフィアから攻撃を受けて、うずくまる俊也。これに関しては自業自得だなつ。

そんなことをしているうちに、俊也の様子が急変する。

「ぐ……」「まつ、があああ……」

必死に押さえ込むよつて口を両手で覆い、苦しそうに呻あだした。

「え、ちよつとーー、どつしたのよー？」

砂利に方膝をつけていた美鈴は俊也の変化につけ早く気づき、駆け寄つてくる。

「やここまで強く殴つてないでしょーー、そんなに痛かったのーー！」

違う、と俊也は思つ。

しかし口が動かず、体がきしむ。

つこには口から血が流れ出てきた。

「「「」」」が……」「まつ」

吐血は一向に收まらず、心配そうな表情で美鈴とソフィアは彼を見つめた。

と、同時に。

郁も銃を通して彼らの行動を見ていた。

いきなり苦しそうにうめきだし、吐血した藤堂俊也。

それにはせん二人は、彼の存在をあまり深く知らないようだ。

しかし、彼女は知っていた。

彼女の属する組織が、美鈴の件とは別に、藤堂俊也という人物に監視を置いていたのを。

まさか美鈴と合流するとは思っていなかつたが、それでも美鈴を捕獲成功し、彼の能力を組織のものにできれば上々だと、郁の主は言った。

その主に有無を言わぬ従うのが僕の役目。
いくら、僕となつた理由が脅迫でも。

郁への舞令は二つ。

ディーモン・R・美鈴の捕獲。

藤堂俊也の監視。

田中ソフィアの抹殺。

主はこうも言っていた。

今のところ藤堂俊也が暴走する可能性は低い。監視は続けてもらつが、最優先事項は田中ソフィアの抹殺と、ディーモン・R・美鈴の捕獲だ、と。

郁は主の言葉を思い出しながら、銃器を通して狙いを定める。

まずは、田中ソフィアの抹殺。

組織の情報が漏れる前に始末をする。

郁はかまえる。

銃口をソフィアの胸、心臓へと向け

発砲した。

バンッ

短い発砲音が静まり返った空に響く。

それにつづいて俊也は、きしむ体を無理やり動かして起き上がる。

動かないはずの体を無理やり動かすのだ。

そして、一度は命を狙われた相手とはいえ、今回は命を救ってくれた恩人を突き飛ばす。

もちろんまだ『第一リミッター』は解除されている。

眼にも止まらぬ速さで動き出した彼を、この場にいる全員が捕まることができなかつた。

美鈴にはからうじて見えた、彼の残像。

しかしそれを見つけたときには俊也はソフィアを突き飛ばしていて、そのうえ手刀で弾丸を打ち落としていた。

そして、崩れるように意識を失つ。
相当辛かつたのだろう。

それを見て、美鈴は確信した。

この男ならば大丈夫、と。

戦闘（前書き）

作者に専門的な知識はありません。

藤堂俊也が気を失つて数秒。

一発目の弾丸がソフィアを襲う。

郁は容赦なく彼女の頭に狙いを定めていた。もちろん突き飛ばされたソフィアは急に倒れた俊也を見ては困惑している。

しかし狙いが自分にかわったことによって、彼女の頭は俊也のことをぬかせばスッキリしていた。

彼女の言い分で言うと「所詮アルバイト」だが、彼女を郁が狙つたということは、その「所詮アルバイト」も組織の秘密を知れば、または任務遂行できなければ抹殺という命が下る、と言うことを教えている。

美鈴は郁への命令に『ソフィアの抹殺』もあることを改めて知り、糸を起用に使いこなし弾丸をはじいたソフィアを眺めるよつに見ていた。

そして俊也のほうへ視線を動かすと、美鈴は目を見開いた。

「なつ……ー？」

砂利のうえを裸足で走つたり、勢い良く滑つてできた無数のかすり傷　主に美鈴が無理やり引っ張りまわしたせいであつた傷だが、跡形もなく消えていたのだ。

しかしそれに気をとられていたのも一瞬。

今度は標的が美鈴へと変わつた。

『戦場では一瞬の迷いで命を落とすことになる』

それは超凜学園の理事長が言つた言葉だ。

彼女がまだ、その艶やかな黒髪をボーネテールにしていたくらい若かつた頃、幼少期だった美鈴に伝えた言葉。

その言葉のおかげでここまで生きてこられたといつても過言ではないくらい、美鈴にとって理事長の存在はかなり大きかった。

一瞬にしてスイッチが切り替わる。

美鈴はそのフワリとした水色の長い髪をたなびかせながら華麗に弾丸をかわし、拳銃を郁へと向ける。
そして撃つ。

可憐で、無駄のない動き。

この動作をすること0・5秒。

訓練された動きだった。

しかしそれに対応した郁。

彼女も弾丸を連射する。

もちろん回転式拳銃リボルバーが狙撃銃ライフルの威力に、速さに勝てるわけもなく。

美鈴の放った弾丸は難なく郁の弾に弾かれた。
同時に彼女は新たに懐から拳銃を取り出す。

黒く、今まで美鈴が使っていた銃よりも少し大きく、重い。

単発式拳銃だ。

単発式拳銃は一本の銃身を持ち、一発の弾しか装填できない古式の拳銃。

次弾を装填するにも少し時間がかかるし、威力もそれほどでもない。

すでに郁の弾は美鈴の目の前にまできている。
しかし彼女の顔には焦りや苛立ちといった感情は一切なく、むしろ余裕そうな笑みを浮かべていた。

そして、撃つ。

彼女の弾丸は鈍い大きな発砲音をたて、郁の放った弾を無視し、郁本体へとものすごい速さで飛んでいった。

そして郁の弾はソフィアによつて防がれ、美鈴は傷一つ負つていな
い。

戦闘（後書き）

すみません、短いです。

次回は多少長くなる（予定）なので、よろしくお願いします。

決着

「なつ……」

それに郁は小さく悲鳴をあげた。
すでに田の前に来ている弾丸。そして、

ガンッ！

自分の持っていた狙撃銃がその弾丸によつて弾かれた。

その、一瞬のすきに、美鈴はすでに田の前で足を振り上げていく……

「ひつ……」

すぐに、彼女の田の前は真っ暗になった。

美鈴の足が、郁の首裏へと直撃した。

やがて郁は氣を失い、後ろの方では一瞬にして間合いをつめた美鈴に愕然とするソフィアが間抜けな声をもらしていた。

もううん、このときも俊也は眠りについたまま。

その頃、空では無数の星達が瞬き、流星のよつた輝きを放っていた。

彼女が郁を抱えて木の下へと降りると、ソフィアが駆け寄ってきた。

「ソフィア、彼女を縛ること、できる?」

「?……ああ、できる。だが縛る前に他に武器がないか調べた方が

……

「ぬかりはないわ

……

そういうて自分の手に持つ弾と拳銃を見せた。それにシフィアはあ、とため息をついた。

「お前はそういう女だつたな。
計算高いのを忘れていた」

「まあ。金髪美女にそんなふうに言われるなんて光榮ね」

「なんだと……？」
貴様も俊也（ヒヤウ）同様、私を愚弄するか……？」

「うつれー。あんた年とつたら垂れるわよ」

そういう美鈴の視線は彼女のスレンダーな腰まわりから少し上の、
その大きな胸を見ている。

ぬれているせいか、いつもよじくつきつい見えるそのプロポーション。

「なつ……

真平らの貴様に言われたくないわ！ 垂れるほどものでもないく
せに！」

「平らじゃないわよ！ あんたこそしづくちやのババアになつたら
邪魔で仕方がなくなるわよ！ それに胸なんて脂肪の塊じやない！」

「そんなんに死にたいか！」

「あんた私に勝てると思つてゐるの？ 自意識過剰な奴ね。そんな
んだからあんたんとの組織に殺されそうになるのよー。」

「同じような状況の貴様に言われたくないわー。」

「あんたはあまり実力ないんだから、後ろには注意する」とね。主に拳銃の弾丸には！」

「あからさまに宣戦布告してこなくていい！そんなんだから俊也に迷惑がられるんだつ！」

「はあ？ そんなの関係ないじゃない！」

先程までの戦いが嘘だつたかのようだ、愚痴愚痴と低レベルの口喧嘩を始める女子一人。

しかし二人の口元はなぜか少し微笑んでいて。

「まあ、確かに美鈴はペチャパイ「おだまり！」ゲフウツ」

突然口を挟んできた俊也にすかさず蹴りを食らわす美鈴。

それにソフィアは驚いた。

いや、ソフィアだけではなく、美鈴も（蹴った後に）驚いた。

先程吐血して気を失つた男が、なぜこんなにヘラヘラして美鈴にペチャパ「ゴホンッ」などといえるのだろうか？

まだ郁は氣を失っているというのに。

実のところ氣を失つた理由を美鈴とソフィアは知らない。

俊也が能力を使うたびに寿命を削つてているなんてことは、誰も知らない。

いや、訂正しよう。

俊也を超凜学園に勧誘した学園長とその旦那は知つている。他、一部だけ。

悠里や坂上などは知らないはず。

学園長等もあんな風に見えても秘密厳守する人たちだ。いくら姪っ子だとは言え、勝手に人の大切な秘密をばらすような人ではない。

美鈴もソフィアも、謎を解決できずに俊也を見つめる。

「俊っ」

美鈴が聞こうと口を開いた瞬間。

「ん……」

郁が声をもらした。
気が戻ったのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496u/>

Rの称号

2011年10月29日15時11分発行